

最近の科學技術の發展には目を瞠るものあり。特に顯著なるは計算機並びにそれを驅使する所謂AI技術の成果なり。一流將棋棋士の次々に計算機に敗北を喫するのはその一例なり。高き知能を要する職業の機械に奪はるる日も遠からじと訴ふる聲巷間に滿つ。

ロボットの開發日に日に進み、思考能力のみならず感情、意思を有する機械も可能ならずやと問はるる時代とはなりぬ。過日テレビにてさる研究所にてロボットの指の感觸を人のそれと等しくせんがため指紋を取入れたりと報ぜられぬ。いづれ人と見分け難きロボットも出現に至るべし。

ロボットの人に近づく一方、人體にその一部として機械の取入れらるる動きあるもまた無視すべからず。一例を擧ぐれば後頭部に超小型の回路を埋込み海馬と精妙に繋ぎ、記憶力を驚異的に向上せしむる技術、開發の途上にあり。一度この技術完成に至らば、それを採用せんとする動きを妨ぐるべし能はず。その社會的影響推して知るべし。目や耳などの感覺器官の高精度の然るべきセンサーによる置換へなども既に計畫せらる。

ロボットの痛みを知り、感情を備ふるに及ばば、これを引き續き使ひ捨て可能なる機械として使用すること果して可能なりや。遠き將來に於て人間と機械の境界著しく不分明となることは疑ひなし。ロボットに人に等しき權利を認むるは難ければ、恐らく人類は第二奴隸制時代に入るべし。政治的、經濟的更には宗教的に深刻なる論議の起ること避けられず。

(平成二十九年七月二十七日受附)